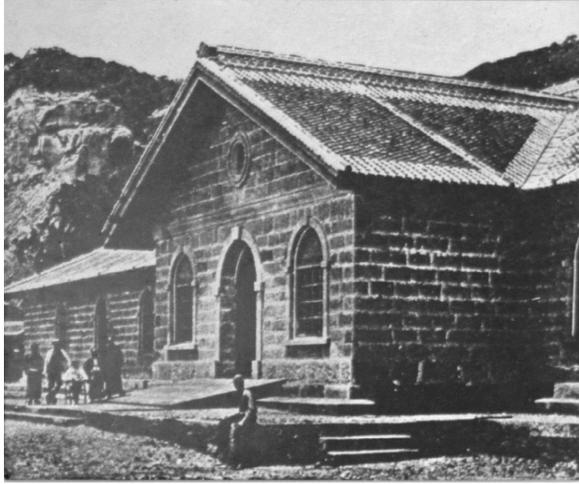
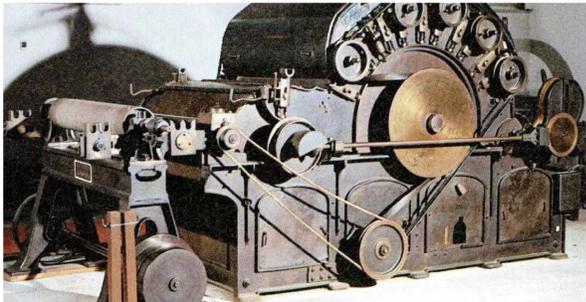


# 日本機械紡績の嚆矢・鹿児島紡績所



鹿児島紡績所正面  
(出典：『かごしま歴史散歩』)



慶応3年英国から輸入された梳綿機  
出典：飯塚一雄『技術史の旅』

ムほか6名の技師の指導、監督により行われた。紡績所では職工200人が1日10時間就労して48貫の綿糸が生産され、白木綿と縞類の一部は大阪で販売した。明治2年、政府に提出した記録には白木綿65,277反、かせいと2,651斤であった。英国人技師は当時の日本の情勢に不安を感じて1年で帰国した。以後日本人だけで運営された。その後、新鋭の紡績工場が競争相手となり、明治30年に閉鎖した。熟練した職工たちは全国各地の紡績工場に移った。

鹿児島紡績所は、事業として成功しなかったが、この先進技術を受け入れの苦労を最初に経験した。技能者を育て全国に送り出し、日本紡績業の発展に先駆的な役割を果たした。

安政開港直後の横浜の綿織物・毛織物は輸入品総額の92%を占めていた。当時薩摩藩主島津斉彬は琉球貿易の洋糸(絹綿交糸)をみて、「将来日本の膏血を絞るもの、西洋の綿布にあり」と喝破した。藩に洋式紡績工場の創設を夢見て没した。斉彬の意志を継いだ島津忠義は藩の子弟を慶応元年(1865)英国留学させた。その監督の名のもとに新納刑部、五代友厚らに紡績業の視察、紡績機械、動力機の注文、技師の招聘等の任務を与えて派遣した。こうして日本の機械綿糸紡績は鹿児島紡績所の創設で始まった。

慶応3年5月、英国プラット社の技師エッチ・エインレーの設計と英国人技師のもと、プラット社製紡績機械の設置で工場は竣工した。機械はスロトル6台(1848錘)、ミュール精紡機3台(1800錘)、はじめ開綿機、打綿機、練篠機、始紡機、磨針機、梳綿機、力織機100台、蒸気機関などが設置された。機械の据付・運転の技術は、プラット社の技師イー・ホーム



鹿児島紡績所技師館(現、異人館)



石河確太郎正龍(1825-1895)は、斉彬の遺志である鹿児島紡績所の創設に尽力した。彼は長崎で蘭学を学び安政2年(1855)斉彬により薩摩藩の藩主の相談役に処遇された。在藩中に電気事業、築碁事業、砲術と教育、開成学校の教授として航海、外国語等の教育に携わる。生涯の仕事として綿糸紡績に関わる技術指導者であった。また水車の知識や経験も得ていた。動機は斉彬から英文の紡績カタログの蘭語翻訳をオランダ人に依頼、これを読んだことから創設に尽くすことになる。石河は文久3年(1863)、綿糸機械紡績の重要性と必要性の堺紡績所設立の建白書を提出し、鹿児島紡績所の職工6名の指導のもとで明治3年開業した。鹿児島紡績所の技術や経験が堺紡績の技術に継承伝播されていった。明治14年開業の愛知紡績所にも技術継承された。

石河確太郎正龍(1825~1895)

写真の出典：『本邦綿糸紡績史』